

6 ^{きょうど} 郷土の開発につくした人たち

1 用水を引く



用水のできる前のようす

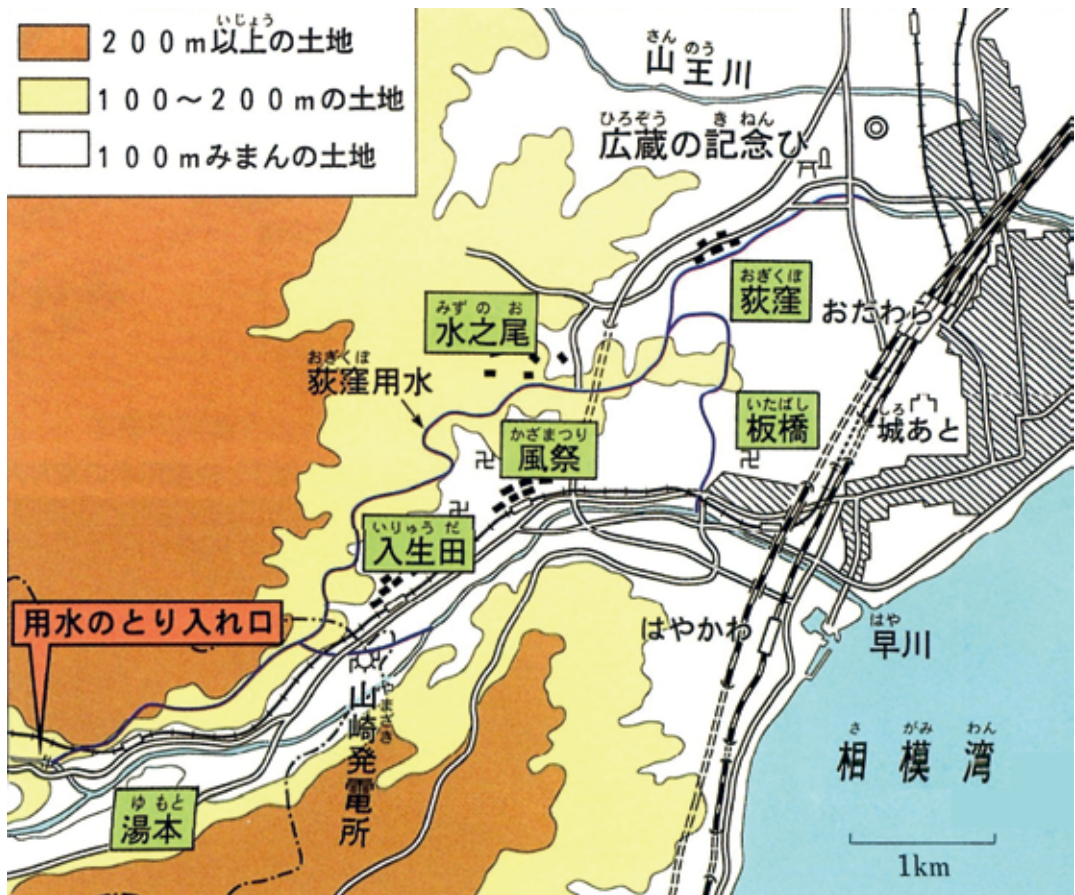


用水がひかれて開かれた水田（今のようす）

用水ができる前は
どんなようす
だったのかな。

どこからどのようにして
水を引いたのかな。

用水が引かれて、
人々のくらしは
どのように
変わったのかな。



用水が流れているところとまわりのようす

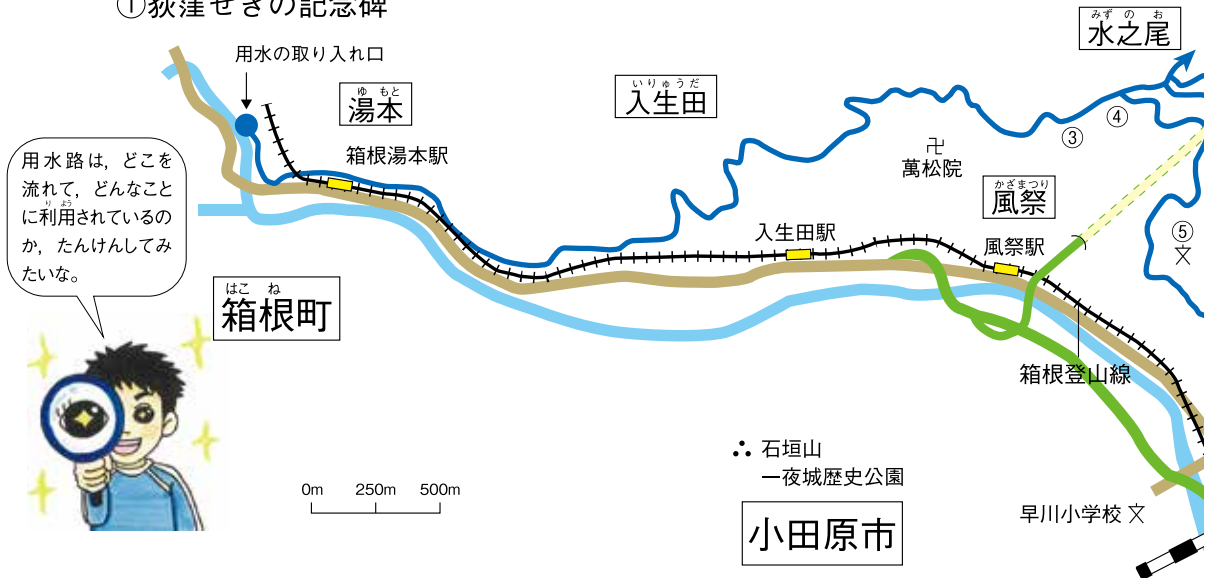
おぎくぼ
萩達用水のたんけん



石碑にきざまれている話

この石碑は、萩達せぎの記念碑です。このせぎをつくるときに、中心になって働いた川口広蔵をしのいで、萩達の人たちが建てたものです。このせぎは、今から200年ほど前に、苦労してつくりあげたといわれています。湯本から早川の水を引いて、萩達などの田に使われてきました。

① 萩達せぎの記念碑



③ 一番長い桜田隧道(340m)の入り口
 (竹の棒は、180cmあります。)



④ 桜田隧道の出口(右)と
 板橋用水の取り入れ口(左)

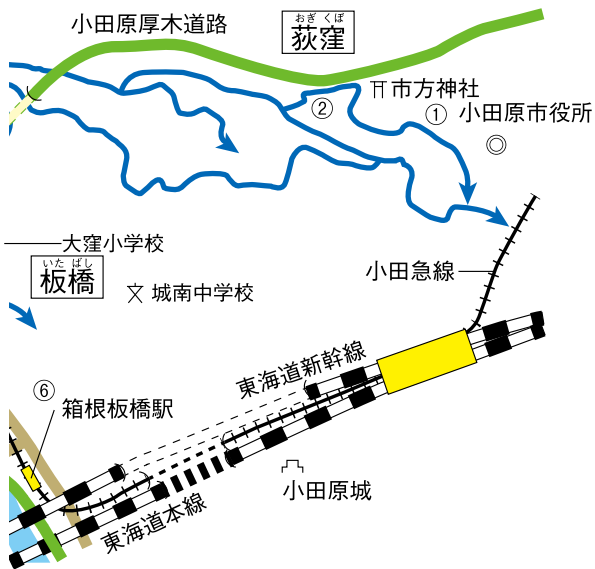




こまがた
②駒形の水車



⑤板橋用水の流れ(上)と
近くの大窪小学校(下)



⑥小田原用水と合流

(※生活用水として使われています。)



せぎ
田に水をひくため、川をせきとめ、みぞやトンネルをほって水を通した用水路のことです。

用水路ができる前の村の人は、どのような暮らしをしていたのでしょうか。

水をもとめる村人たち

荻窪村は山のふもとにある村です。水が足りずに、あまり米ができなかったため、おもに畑で、おかぼや麦、粟などをつくっていました。また、村の人は、農業のあいまに、山でたきぎをとって小田原のまちに売りにいき、暮らしの助けにしていました。そのため、村の人は、田を開いて、米をもっとつくりたいと願い続けてきました。「水があったら、たくさんの米がつくれるのに。水がほしい。」ということが、村の人の長い間の願いだったのです。



畑で作られたおもな作物

そのころ(今からおよそ300年前)、小田原に大きな地しんが起きました。その地しんで、わずかにわき出る水を集める村の水路がこわれてしまいました。また、同じころ、富士山がふん火して、畑にも灰があつくつもってしまいました。

このため、畑はあれはてて、荻窪村の人の暮らしは、ますます苦しくなりました。

家の戸がすさまじく音を立て、雷のような音が鳴りひびき、あられかと思うと黒石まじりの軽石が降ってきた。

夜の八時すぎから砂が降りはじめ、次の日の二十四日になると雷をまじえて大雨のように降った。昼間であるにもかかわらず砂煙で夜のようになり一日中暗かった。

▲1707年(宝永4年)11月23日富士山のふん火のようす

(足柄下郡小船村一現小田原市小船の名主さんの記録から)



火山灰にうまった畑を掘り起こす村の人たち

ところが、このころの農家の人たちは、村をおさめていた役所(小田原藩)に、年貢(税金)として、おもに米をおさめなければなりません。人々のくらしは苦しくなるばかりでした。



年貢をおさめる村の人たち

ひろぞう
 広蔵や村人たちが
 用水路をつくるために、
 どのような苦労や
 工夫をしたのか
 調べてみましょう。

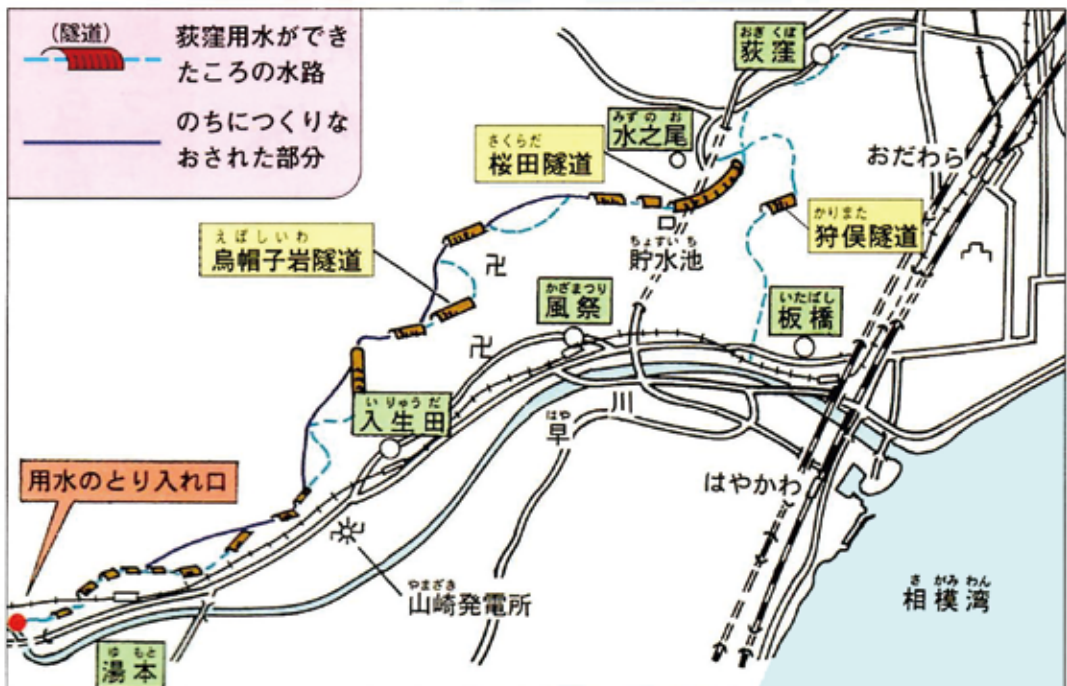
用水路づくりと村人

「水がほしい。」と、願い続けた萩窪村の人たちでしたが、用水をどこからどのように引いたらよいかわかりませんでした。川口広蔵は、今の山北町に住んでいました。広蔵は、山北の瀬戸せぎをつくる工事を手伝ったことがあるので、そく量や土木工事などの高い技じゅつを使う、用水路づくりの方法を知っていました。

あるとき萩窪村にきた広蔵に、村の人たちは自分たちの願いを話しました。話を聞いた広蔵は、萩窪村に用水路をつくり、水に困らない米づくりのできる村にかえたい、村人が安心してくらせる土地にしたいと考えました。村の人たちと力を合わせて用水路づくりをしようと決心した広蔵は、さっそく萩窪村のまわりの山や谷を調べ始めました。

隧道

「隧道」は「トンネル」と同じです。文の中では「トンネル」を使っています。



萩窪用水の道すじ

その結果、早川の上流の湯本から水を引き入れる水路をつくり、山にトンネルをほれば、荻窪村まで水を引くことができると考えました。この計画を広蔵は、村の人たちに話しました。

村の人たちは、水の取り入れ口が遠いうえに、その間に山がかさなり、谷や沢が深いので無理ではないかと反対しましたが、それでも力を合わせて、この大仕事をやってみようということになりました。

広蔵は、村の代表者とともに工事の願いを小田原藩に出しましたが、あまりにも大きな計画だったため、なかなかゆるしが出ませんでした。しかし、村人たちの強い願いと、米の生産を高めることにも役立つということで、ようやくゆるしが出ました。さっそく、広蔵は、小田原藩のえんじょを受けて村の人々とともに工事のじゅんびにとりかかりました。



土地のようすを調べる広蔵



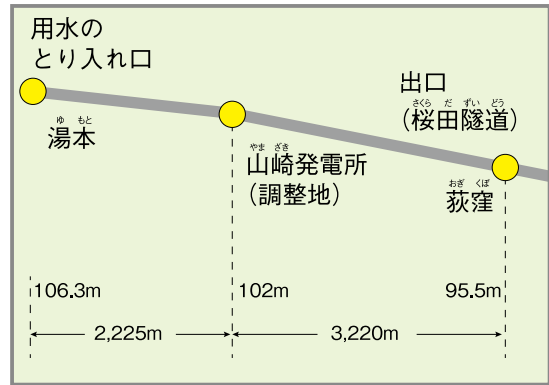
村の人たちに用水路づくりの計画を話す広蔵

用水路づくりは、
どのように行われた
のでしょうか。

むずかしかった工事

工事は、水路を決めることから始まりました。早川の水の取り入れ口と、萩窪村がわの出口の高さの差を考えて、用水路の道すじを決めなければなりません。しかし、計画の道すじには山がおりかさなるように続き、深い谷や沢がたくさんあるので

す。
用水路の高低をはかるのには、予定した場所に板やすげかさをなれば、むかひの山から見通して旗をふってはかりました。夜は、旗のかわりに、ちょうちんを使いました。また、水路が谷や沢をこえるところは、板でといをつくり、橋のようにしてわたす工夫をしました。



用水路の取り入れ口と出口の高さ

用水路の高さの
ちがいは、およそ
11mなんだね。



ちょうちんを使った夜のそく量



橋のようにして谷や沢をわたした用水路
(箱せぎともいいます)

このような苦心のすえに、はばが90cm～180cm、長さがおよそ10.3kmの用水路の道すじを決めました。

そして、その長さの間に、短いものをふくめると40以上ものトンネルをほりぬくということも決めました。

トンネルほりも、たいへんな苦勞でした。じしゃくで方向を、水準器すいじゆんきでかたむきを調べながらほっていましたが、ほりまちがえてしまったときもありました。

トンネルの中はまっくらなので、がんどうやカンテラなどをあかりにしました。トンネルをほる道具は、石のみとつち（ハンマー）だけです。石のみを岩にあて、つちでたたきくだいていきました。くだいた岩は、もっこで外いに運び出すのです。かたい岩ばかりの烏帽子岩えぼしいわトンネルは、ほるのに1年以上もかかりました。

カンテラなどの油として、およそ70ℓ入りのたるを13たる（ドラムかんで約5本分）も使ったといわれています。

また、土がやわらかいところの水路づくりは、水がもれたり土手がくずれたりするので、土台を石がきで固めました。そして、その上に箱せぎをつなぎ合わせて、水を通しました。



トンネルをほる村の人たち

工事の間にどんな苦勞があったのか考えてみましょう。

長引く工事

こうして始まった用水路づくりでしたが、むずかしい工事やさい害(ききんや大雨や日照りなど)が続いて、計画よりたいへんおくれれてしまいました。工事が長びくにつれて、完成をうたがう人や仕事をやめる人も出てきました。

年 (せいき)	おもなできごと
1779年	川村(今の山北町)で、瀬戸せぎ(川村用水)の工事が始まる。
1782年	萩窪用水をつくるじゅんぴが始まる。
1797年	萩窪用水の工事、本格的に始まる。
1798年	協力者のひとり(岡部源七)が工事の犠牲でなくなる。
1799年	萩窪用水が完成し、6つの村に用水がゆきわたる。
1888年	このころ、広蔵に感謝する集まり「広蔵念仏」が始まる。
1923年	関東大震災があり、用水がこわされる。
1925年	用水路のしゅう理やつくりかえの工事が終わる。
1957年	広蔵をたたえる記念碑が建てられる。

また、村の人たちからは、ほった土や岩が雨で流されてきて、山があれてこまるといううったえがあったり、寺からは、しき地の中に用水路を通すのはこまるという反対があったりしました。

さらに、^{ひろぞう}広蔵がもっともたよりにしていた協力者の^{でし}弟子のひとりが、^{こうじ}工事中の^{じこ}事故でなくなってしまうということもかさなりました。



土を運ぶ道具



ほりまちがえたとと思われるところと、あかりを置いたと思われるあな(右下)

そのうえ、工事のとちゅうに、このあたりで、ききんや大雨によるこ
う水など、思いがけないできごとが次々におこりました。そのため、小
田原藩^{はん}からの工事のえんじょもとだえがちとなりました。こうして、工
事は計画よりもおおはばにおくれてしまったのです。



城南中学校近くの狩俣^{かりまた}隧道^{ずいどう}入口

はたらいた人の中には、
工事中に事故でなくな
った人もいたんだね。



トンネルの中の様子(桜田^{さくらだ}隧道^{ずいどう})
(高さは、180cmほどあります。)



荻窪用水の完成をよろこぶ人たち

用水路が完成して村の人たちのくらしは、どのように変わったのか考えてみましょう。

水田を開く

小田原藩^{ほん}のえんじょと広蔵^{ひろぞう}や村の人たちの苦勞と努力によって、この大工事も、ついに完成しました。

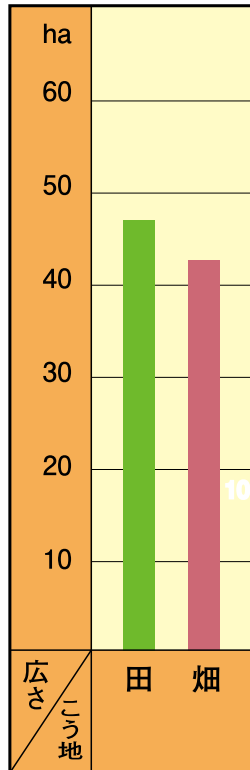
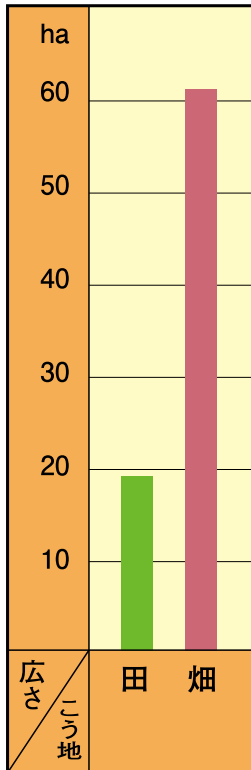
長い間の願いがかなって、用水路に早川からの水が流れだしたとき、人々は、手を取り合ってよろこびました。荻窪村^{おぎくぼ}はもちろん、用水路ぞいの村々（湯本^{ゆもと}・入生田^{いりゆうだ}・風祭^{かざまつり}・板橋^{いたばし}・水之尾^{みずのお}など）のあれ地に水田が開かれ、米づくりができるようになったのです。（用水を村々に分けるために、8つの水門と水路をつくりました。）

6つの村の人々は、次々に田をふやし、やがて、合わせて58haほどの新田ができました。用水路が完成してから70年後には、荻窪村^{おぎくぼ}の水田はおよそ2.5倍にもなったそうです。また、用水を利用して水車をまわし、米つきなどもできるようになりました。

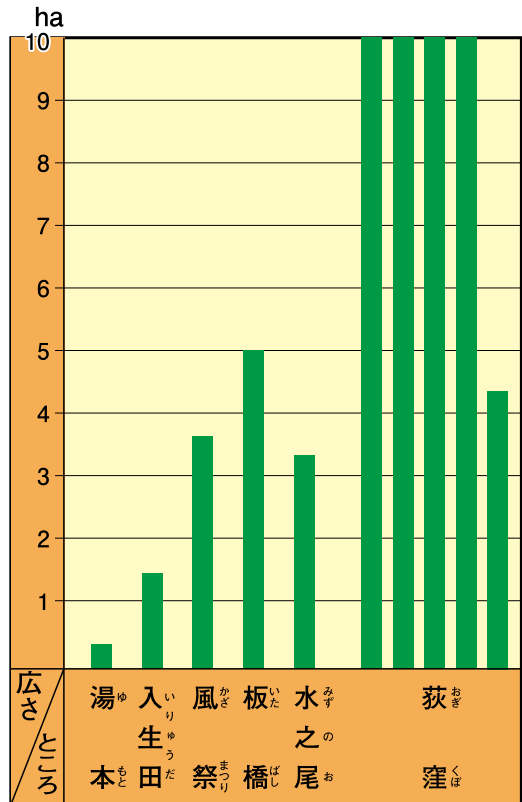
こうして、広蔵^{ひろぞう}は、大工事をやりとげたはたらきによって、小田原藩^{ほん}から毎年^{ひょう}5俵ずつの米をあたえられるようになったということです。

360年ほど前
1659年(万治2年)

140年ほど前
1876年(明治9年)



荻窪村の田畑のうつりかわり
(内田 清氏の研究より)



荻窪用水からひいている田の広さ
1897年(明治30年)

荻窪の人々は、今でも春と秋のお彼岸には、「^{ひろぞうねんぶつ}広蔵念仏」をとねえるために集まったり、^{はか}お墓まいりをしたりして、^{ひろぞう}広蔵や村の人たちの苦勞をわすれないようにしているようです。

^{びょう}**米一俵**
一俵の米は、
重さ60kgです。



田んぼがずい分多くなって、村のようすもかわったわね。

用水はどのように
利用されているの
でしょう。

用水の利用

萩窪^{おぎくぼ}用水は、その後、水路などのしゅう理や改良をくわえながら、ずっと利用されてきました。



昔の萩窪用水の取り入れ口ふきん

ところが、今からおよそ100年前におきた大地しんによって、用水路は、すっかりこわれてしまいました。

しかし、用水路ぞいの村の人たちは、県の助けをかりて、用水路をしゅう理したり、つくりかえたりして、水をとり入れられるようにしました。このため、つくりなおす前のようすとちがっているところが見られます。その1つが、用水の取り入れ口です。



今の用水の取り入れ口

用水の使い方も、昔とくらべて変わってきました。昔は、おもに米づくりや水車を回すために使っていました。

今では、そのほかに、みかんづくりや発電，ぼう火用水，はい水路などにも利用されています。

このように，^{おぎくぼ}荻窪用水は，今も用水路ぞいの多くの人たちに使われているのです。また，平成23年には，きちょうな「^{どぼく いさん}土木遺産」としてにん定されました。



発電するための送水管



みかんのさいばいに使われる用水



さかきのさいばいに使われる用水



米づくりに使われる用水



荻窪用水から取り入れた水で育つ稲